

陰陽を結ぶ因幡道は  
地域のくらしを支える

# くろお 黒尾トンネル



姫路から鳥取へ向う道で、佐用、大原そして智頭に至る道を因幡往来（現・国道 373 号）、もしくは上方街道と言ひ、津山から黒尾峠を越えて智頭に至る道を因幡道（現・国道 53 号）と言いました。鳥取から見れば鳥取城下から智頭、志戸坂へ行くのが智頭往来、あるいは大坂、京への主要街道でしたので上方往来とも呼ばれました。智頭で分かれて黒尾峠を越える道が備前街道となります。ただ、因幡道は中央との関わりが深かった因幡往来と違い、美作と智頭を結ぶ暮らしの道という要素が強かったようです。

黒尾峠の県境付近には、「文政七 四月二十四日 泉州 石工忠衛作」と刻まれた「うんの吼の地蔵」が祀られています。言い伝えでは、智頭町栃本の川石で造り、村中でコロを使って引き上げたということです。冬季は雪深い地のため通行が閉ざされることも多く、道中の安全を祈って峠越えをしたことがうかがえる地蔵様です。この信仰からしても、明治政府による道路改修に人々が大きな期待を寄せたことが十分に想像できます。

因幡道は明治 6（1873）年の道路三区分によって県道第一等となり、昭和 27（1952）年の道路法改正で「二級国道 179 号線」になりました。そして同 37 年 5 月に「一級国道 53 号線」となり、翌年から直轄工事として一次改築が始まりました。

岡山・鳥取両県境の黒尾峠地区は、昭和 42 年から着手されました。黒尾峠より約 80 m 低い位置にトンネルをつけることになりましたが、トンネルを挟んで、岡山県側は延長 4.7 km で標高差 250 m をつなぎ、鳥取県側は延長 7.2 km で標高差 320 m での峠越えを解決するために、岡山側はループ橋で、鳥取側は 8 橋を架けてつなぐ設計になりました。

黒尾トンネル（延長 843 m）工事は建設省鳥取工事事務所（現・国土交通省鳥取河川国道事務所）が担当し、トンネルは昭和 44 年に、そして同 46 年 9 月 24 日に全線開通の日を迎えました。旧道は幅員が狭いうえにカーブが多く、冬季は積雪のためにしばしば通行不能になっていましたが、ようやく通年通行が可能となり、地域の発展に大きな役割を果たしています。

## ■位置図



因幡への峠越えの道



黒尾トンネル（1970）  
（『写真に見る国道 53 号の今昔』より転載）



黒尾トンネル  
ループ橋をはじめ多くの橋でつないだ国道 53 号は、積雪の心配なく通行できるようになった。



因幡へ続く国道 53 号